
イッシュ地方ぶらり珍道中

独活

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イツシュ地方ぶらり珍道中

【Nコード】

N36520

【作者名】

独活

【あらすじ】

ホワイトとかチェレンとかベルとかアララギ博士とかが喋りながら進むだけのお話です。ネタバレしかりません。

とにかくやる気のない文章なので、やる気のない文章が嫌いな方には向かないです。

ここでの『やる気がない』とは『グダグダ』とか、そういう解釈を

してください

それを分かった上でお読み下さい

皆さんがやる気のないひと時を過ごせたら幸いです

episode 1 - 1 それじゃあベルにはボカフをあげよう！

ゲーム開始　　アララギ博士に図鑑をもらっまで

ホワイト「こんにちは。主人公のホワイトです。
早速ですが、ポケモンBWやります。」

ホワイト「…とりあえず、ホワイト購入しました。

ダイパで493まで行った時、

「これでひとまずポケモンとしては完成だろうな。
ポケモンスタジアム的なものは出るだろうけど新ポケはもうないだ
ろ。」

とずっと思ってたので、ホワイト発売の知らせにびっくりしました。

なんだ、まだ増えるのか！泣き声とかポケモンの種類とか大丈夫か？
と色々不安でしたが

超人気になったので、自分も買ってみたわけです。

とりあえず、これから起動してみます。

ちなみに、自分はいつもゲーム買つと説明書読む癖がありますが、
本作に限って説明書には一切目を通していません。

出会いは新鮮な方がいいもの。

それでは…起動！ちなみにDSiです。」

ホワイト「おお…ポケモンカンパニー…
ゲームフリークのロゴも凄い凝ってる…

ん？何だこの王の間みたいなのは…
王に何か渡してる？FEっぽい構図だなあ…

とか色々思いながら、とりあえずタイトルです。
今作はタイトルのBGMが派手で迫力ありますね。
ダイパプラチナは不気味でしたけど。

とりあえずAを押すと、タイトルでくるくる回ってたポケモンが鳴きました。

どうでもいいけどこのポケモン、全部黒いのに一箇所だけ青いのね。
この事が何かゲーム中で重要な意味を…成さないか。
それじゃあはじめます。最初から。性別は男性です」

「こんにちは！ポケットモンスターの世界へようこそ！」

ホワイト「！！？　じ…じじいじゃないだと！！？
ポケモン博士がじじいじゃないだと！？
いや確かに、ウツギとかオダマキとか若かったけど…」

「私の名前はアララギ。」

ホワイト「何と…！女性博士…これは初めてだな…」

僕は熟女あんま好きじゃないけどこれは期待出来る！！」

アララギ「何ぶつぶつ言ってるの？まあいいわ、名前教えて？」

ホワイト「僕はホワイトです。ホワイトです。ホワイトです」

アララギ「分かった、ホワイトね。三回も言わないでいいわよ。で…こちらはあなたのお友達よ」

ホワイト「ん？二人もいるのか…」

！こ、これが今作のライバルの女の子か…！

アララギ先生！この子の名前何ですか！」

アララギ「こっちはチェレン。真面目で頼れる男の子よ」

ホワイト「先生！無視しないで！こっちの子の名前教えて下さい！」

アララギ「はいはい。こっちはベル。ちょっとおとりした子」

ホワイト「ベル！ベルですね！ベル！」

アララギ「興奮しすぎよー。ちょっと落ち着きなさい」

ホワイト「はい！」

アララギ「ちゃんと男の方の名前も覚えてやってねー」

ホワイト「はい！確か…チェで始まった…」

そうだ！チェリムだ！」

アララギ「チェレンよー。何でシンオウのポケモンの名前になつてんのよー」

ホワイト「そんな奴の名前なんてどうでもいいです！早く始めたいです！」

アララギ「はいはい、分かりました。それじゃあ、とつとと始めますか。

ポケットモンスターの世界へ、レッツ、ゴー！」

ホワイト「…ここは… 僕の、部屋でしょうか」

「ホワイト！」

ホワイト「ん？何だ、さっきのメガネっ子だ」

チェレン「何だよメガネっ子って。僕は男だぞ」

ホワイト「じゃあメガネ田君でいいよね。眼鏡田君」

チェレン「変なあだ名つけるな!!」

ホワイト「えー… 分かったよ。ちゃんと名前で呼ぶよ。チェリンボ」

チェレン「チェリンボじゃない!! チェレンだ!!」

ホワイト「あ、そうだった」

チェレン「全く。今日は、アララギ博士からポケモンをもらえるって聞いてわざわざ君の家まで来たのに」

ホワイト「え、そうなの？」

チェレン「そうなのって… ほら、目の前にプレゼントがあるだろ」

ホワイト「あ、ホントだ! ま、まさかこの中に最初の三匹が!!」

チェレン「そうだよ… お前」

ホワイト「えー、だってゲーム始めたばかりなんだもん」

チェレン「何訳のわからない事を… それより、ベルの奴遅いな」

ホワイト「ベル!! ベル来るの!?! うちにベル来んの!?!」

チエレン「何だよ、うるさいな…来るよ。
ベル、いつもマイペースだけど、こんな大事な日にまでマイペースか…」

ホワイト「家に来る…ハルカとはまた違うパターンだ。これも良い」
チエレン「あ、やっと来た」

ベル「あのう…ごめんね、また遅くなっちゃった」

ホワイト「こんにちは！ベル！」

ベル「こんにちは？何、いきなり改まっちゃって」

チエレン「ベル、遅いよ…」

君がマイペースなのは10年も前から知ってるけどさ。
今日はポケモンをもらえる日だったのに」

ホワイト「10年も前から！！？」

チエレン「？だって僕ら幼馴染じゃないか」

ホワイト「…貴様…抜け駆けを！！」

チエレン「な、何だよ、意味分らないよ」

ホワイト「…あ、三人って事は…この三人でポケモンを共有するの
か！」

ベル「そうだよ。さあ、ホワイト、とりあえず開けてみようよ！」

チエレン「それもそうだな。ホワイト、君から選ぶんだ」

ホワイト「まあね。僕主人公だしね」

ベル「どんなポケモンがいるのかな〜！わくわく！」

ホワイト（やばい、予想以上に今作のベル可愛いぞ…）

チエレン「ほら、早く開けなよ」

ホワイト「あ、はいはい。」

…どれにするか…

ポカブ、ミジュマル、ツタージャか…」

チエレン「んー。僕だったらミジュマルがいいかな」

ホワイト「お前は黙ってる！僕が選ぶんだ！！」

チエレン「はい、はい」

ベル「わー！このポカブって子可愛いねー！」

ホワイト「それじゃあベルにはポカブをあげよう！」

チエレン「何この待遇の差」

ベル「へ？で、でもいいの？」

ホワイト「いいのいいの！」

僕はミジュマルが欲しかったしね！」

ベル「ありがと〜！じゃあ私ポケラブにする！」

チエレン「…ま、僕は、最初からツタージャが欲しかったけど」

ベル「それじゃあ早速！」

ホワイト「え？」

ベル「勝負しようよ！ポケモン勝負！」

ホワイト「嘘？いきなり？初代のライバルもいきなりだったけど」

ベル「まず勝負してみよ！ね！」

チエレン「…ベル、ここは家の中だよ？」

ベル「大丈夫だよ！」

チエレン「…まあ、そうだな。僕も勝負がしたいな。

それじゃ、ホワイト、ちよつと勝負してくれるかい？」

ホワイト「誰がお前なんかと勝負するか！！」

それにどーせたいあたりしか覚えてないだろ！つまらん！」

ベル「そっかー。私も勝負したかったんだけどなー」

ホワイト「ベルさん僕と勝負しましょうー!!」

チエレン「何この扱いの差」

ベル「いいの!?でもホワイトさっき…」

ホワイト「ベルさんとの勝負がつまらないはずがないさ!」

チエレン「たいあたりしか覚えてないのは同じだろ…」

ベル「よおーし!それじゃあいつくよー!」

ホワイト「ああ…新バージョンポケモン最初の対戦相手が…
ベルで、とても、嬉しいです…」

ベル「んゝ、ボールが抜けないゝ…　　ととととと」

ホワイト「何!?この仕草!!」

この仕草何!?僕を萌え殺す気だな!!」

チエレン「うるさいなあ、早くポケモン出せよ」

ホワイト「外野は黙ってる!!」

…よし、ゆけ、ミジユマル！」

ベル「んゝっと、ポカブ、たいあたりゝっ！」

ホワイト「僕も全力でベルちゃんに体当たりしまーす！…！」

チエレン「おい！やめろって！

トレーナー「攻撃するとか反則だろ！…！」

ホワイト「攻撃じゃないよ！僕はただ愛の抱擁を…！」

チエレン「気持ち悪いわ！！さっさとお前も命令しろ！！！」

ホワイト「はいはい、一応ポケモンバトルだし。
全力で向かわないと失礼だよねー。」

おっと、攻撃を受けた。

…最初のバトルだし、やっぱたいあたりだけか。
とりあえずたいあたり連発すれば何とか…！」

ホワイト「何だと…？」

ベル「あとちよっとだー！」

ホワイト「な、何だ…？」

まさかこの戦いって完全なる運ゲーか…？

い、いや、何かキズぐすりとか…な、ない…！」

ベル「ポカブー！たいあたり〜！」

ホワイト「うわああああああ」

ベル「ふええ…」

何だか分らず、ポケモンに技を出してもらってたら、何か勝てちゃったあ…」

ホワイト「初バトルで負けるとか…最悪のスタート…」

ベル「ご、ごめんね。私なんかが勝っちゃって」

ホワイト「いえいえいえいえいえ！…ベルさんに負けたなら本望です！…」

チエレン「調子の良い奴…」

それより、ベル。周りを見てみたら？」

ベル「へ？あ…あーっ…！部屋の中が…ぐちゃぐちゃに…」

チエレン「はあ。全く、少しは周りも見ないと駄目だよ？」

ベル「うん…ごめん…」 シュン

ホワイト「こらチェレン！初めてのバトルなんだから別にいいだろ！」

チェレン「ここお前の家だぞ…？」

ホワイト「いいのいいの！ベルさんに壊されたならむしろ残しておきたい！」

チェレン「マジで何なんだこいつ…」

ベル「チェレンは…？どうするの？」

チェレン「決まってるさ。バトルするよ」

ホワイト「えー」

チェレン「何そのあからさまに嫌そうな顔…」

大丈夫だよ。ベルと違って僕はちゃんとするから、家は壊さない。それに、僕だけがバトルしないなんて不公平だからね」

ホワイト「チェレン。言つとくが、家壊したら弁償してもらうぞ」

チェレン「何で僕だけ…」

ホワイト「ゆけ！ミジュマル！」

チェレン「ゆけ！ツタージャ！」

ホワイト「もう、こうなったらたいあたりの連発だー！！」

チエレン「ツタージャ！にらみつける！」

ホワイト「そんな小細工通用するかー！！」

ホワイト「勝っちゃいました」

チエレン「くっ、なんでベルに負けて僕に勝つ…？」

ホワイト「べ、ベルさんには手加減してたんだよ。
本気出せばこんなものさ」

チエレン「うう…」

ま、いいか。これから強くなれば。

それじゃ、まずは…」

ベル「ポケモンを取りに行くのね！」

チエレン「バカ、ホワイトのお母さんに謝るのが先だろ」

ベル「はわわ！！そ、そうだった」

チエレン「全く…家を壊したのは君だろ？その君が謝らないでどうする」

ベル「うう…ごめん…」シュン

ホワイト「こらチエレン！お前さっきベルさんの事バカって言ったな！？」

そんな事言つとロクなトレーナーになれないぞ！！

ベル、別にこんな奴の言う事にしなくてもいいからね！」

チエレン「…なんで僕が怒られんの？」

ベル「あの…ごめんなさい！」

ホワイト母「いえいえ、大丈夫よ。

初めての勝負だったんでしょ？

いいわよいいわよ。私が片付けておくから。」

チエレン「優しいお母さんで良かった」

ベル「それにしても…あんなに小さいポケモンも、いざとなると凄い力を発揮するんだね！」

ホワイト「僕のポケットモンスターもいざとなったら凄い力を発揮するよ！」

チエレン「やめろ」

ホワイト母「子供は皆、ポケモンを持って、旅して大人になるのよ」

ベル「…旅、かあ」

チエレン「…それじゃ、僕はアララギ博士の家に行くから」

ベル「あ、私一度家に戻るね！」

チエレン「じゃ、博士の家で待つてるよ！」

ホワイト「…ベルさんは家に帰るのか。
それじゃあ家に行くしかない！」

ベルの家

ベル父「駄目駄目駄目駄目駄目！

駄目駄目駄目駄目！駄目ったら駄目！無駄！」

ベル「えーっ！でも、私だつて出来るもん！」

ベル母「まあまあ。ベルもそういう年になつたんですよ。

良い事じゃないですか。あのベルが一人で冒険に出るなんて」

ベル父「むう…とにかく駄目だからな！」

ベル「そんなあ… もう、いい！」ダッ

ベル父「待ちなさい！ベル！」

ベル「…！？ホワイト！？」

ホワイト「やあ」

ベル「…い、今は、チエレンとか博士には秘密だよ？」

ホワイト」もちろん」

続く

episode 1 - 2 チラーミィか。まるでホワイトみたいな名前だな

アララギ博士研究所 1 番道路 アララギ博士の捕獲の見本

アララギ博士研究所

アララギ「こんにちは！自己紹介を…」

チェレン「知ってますよ。アララギ博士」

アララギ「もう、いいじゃない。」

それより、あなた達。

早くもバトルをしたのね！

ポケモンも、何だかあなた達に懐いてる感じがするわ！」

チェレン「そうですか？」

ベル「ポカブ、私に懐いてくれてるかなあ」

ホワイト「僕はベルさんになつき度MAXです！」

チェレン「お前はちよつと黙れよ」

ホワイト「もう夜に戦わせたなら進化しそうな勢いです！」

チェレン「頼むから黙ってくれ」

ホワイト「それは冗談として、
確かにこのミジユマルが懐いてるような気も……」

アララギ「きつとあなた達は、トレーナーの才能があるわね！
というわけで、今日はあなた達にこれを上げるわ！」

チェレン「こ、これはもしや！」

アララギ「そう！ポケモン図鑑よ！」

これからあなた達には、私の研究の為に、
世界を旅して色んなポケモンと出会って欲しいの！」

ホワイト「博士も運動した方がダイエットになるんじゃないですか」

アララギ「うっさいわね！」

フィールドワークが趣味のオダマキも太ってるじゃない！」

ホワイト「確かに」

アララギ「というわけで、これからあなた達には、
旅をしてもらうわよ！」

もちろん、チャンピオンになるも良し。

名づけて『イッシュ地方ぶらり珍道中』の開幕！」

ホワイト「そんな名前の旅嫌だ……」

アララギ「それじゃ、一番道路に来てちょうだい。
ポケモンの捕まえ方教えてあげるから」

三人「『はい』」

ベル「…いいんだよね？私…」

博士に頼まれたんだから、冒険してもいいんだよね…？」

チェレン「ああ。図鑑を完成させながら、好きなように旅すればいい」

ベル「…嬉しい！」

ホワイト「僕も嬉しいです」

チェレン「さっきから思ってたんだけどさ、

ホワイト、何か口調が改まってない？

なんで今更僕らに改まる必要があるの？」

ホワイト「この方が主人公としてやりやすいんです！
と、僕の遠い遠い親戚のオージエさんも言っていました」

チェレン「そ、そうなんだ。

なら、好きなように呼んでもらってかまわないけど」

ホワイト「かまわないの？なら、チェリンボで決定」

チェレン「それはやめろ」

ベル「チェレンに新しいあだ名がついたね〜！」

チエレン「ベル、君はこんな名前で呼ばないでくれよ」

ベル「えー？」

ホワイト「チエレンは、何だか真面目そうだからね。

真面目だから、僕ら二人がその真面目さをほぐせたらなと思ったんだけど」

ベル「そうなんだ！ホワイトなりにチエレンの事考えてたんだね！」

チエレン「ベル。多分違うぞ…。

こいつはただ僕を馬鹿にしたがつてるだけだ」

ホワイト「そんなわけないじゃないかー。僕達友達でしょー」

チエレン「超棒読み…」

ベル「私の事は何て呼んでくれるの？」

ホワイト「嫁！」

チエレン「ストレートすぎだろ」

ホワイト「…というのは流石にまずいから、ベルさんで良いよ」

ベル「えー？さん付けなんて要らないのにー」

ホワイト「自分なりの敬意です！」

ベル「まあ、ホワイトがそう言いたいならかまわないけど」

研究所外

ベル「おうい！ホワイト、待ってよ！」

ホワイト「はい待ちます待ちます」

ホワイト母「あら、どうだった？博士の話は」

ホワイト「母さん。実は…」

ホワイト母「あらあら、旅する事になったの！？すごい」

ホワイト「いや、まだ何も言っていないけど」

ホワイト母「なーんて、私は既に博士からその話は聞いているわ」

ホワイト「そうだったんですか」

ホワイト母「じゃ、旅するならタウンマップを持っていきなさい」

ホワイト「おお、タウンマップだ」

ホワイト母「それじゃーね、頑張ってねー」

ホワイト「随分と軽いな…」

ベル「それじゃ、行こうか！」

ホワイト「ああ、これから二人の冒険が…」

チェレン「僕はどうしたよ僕は」

一番道路前

チェレン「アララギ博士が待ってるよ。早く行こうよ」

ベル「ねえねえ、最初の一步は皆で踏み出さない？」

チェレン「というと」

ベル「これが最初の一步なんだから、皆で一緒に入ろうよ！」

ホワイト「それは良い考えだー!!」

チェレン「それじゃ、皆で行こうか！」

ホワイト「ベルさんの隣で共に歩ける日が来るなんて…」

チェレン「それじゃ、行くよ…」

ホワイト「ちょっと待った」

チェレン「何だよ前は」

ホワイ「チェレン、あと1マスくらい離れてくれると嬉しいんだけど」

チェレン「あのさ、君は僕を一体なんだと思ってるわけ？」

ホワイ「さくらんぼポケモン」

チェレン「だからチェリンボやめろ！！！！

最初の一步くらい一緒に踏み出していいだろ！？」

ホワイ「えー」

ベル「チェレンも友達じゃない。一緒に踏み出そうよ」

ホワイ「はいそうしましょうか」

チェレン「何この扱いの差」

チェレン「それじゃあ行こう！」

ベル「せーのっ……」

ホワイ「ちよつと待ったあ！！！！」

チェレン「だああああっっ！！早く踏み出させる！！！！」

ホワイト「いや、まずレポート書いておかないと、って思って…」

チェレン「何でここで書くんだよ!!」

んなの踏み出した後にいくらでも書けるだろ!!」

ホワイト「チェレン。ポケモン世界では、

レポートはトイレ並みに重要な事なんだぞ」

チェレン「何その謎の文化」

ホワイト「しかもトイレと違ってどこでも書ける!」

ベル「そっかー。ポケモン世界にトイレがないのはそういう事か!」

チェレン「何故今ので納得する!!?」

ホワイト「つまりだ。現実世界の人とレポートというのを通じて

繋がっているのがこの世界であってそこからトイレ」

チェレン「詳しい説明せんでいい!!」

ベル「ねーねー、早く踏み出そうよ!」

チェレン「一番道路の前でこんなに踏み出さないトレーナーって僕らくらいだぞ…」

ホワイト「それもそうですね。レポート書き終わりました」

チェレン「はあ。なら、今度こそ行くよ!」

ベル「待ったーっ!!」

チエレン「いい加減にしるおおお!!!!!!
今度はベルかよ! 一体何があったんだよ!？」

ベル「ごつめーん、ちょっとクツズレ起こしちゃって」

チエレン「早く直せよ…」

ベル「だって、クツズレたまま1番道路に入ってこけちゃうなんて
かつこ悪いよ」

チエレン「そりゃそうだけどもさ…」

ベル「ありがと、もう直った」

チエレン「…なら、今度こそ本当に行くぞ。」

ベル「せーのっ!!!」

1番道路

ベル「はああ… なんだかドキドキワクワクしちゃうね!」

チエレン「そうだな。ここから旅が…」

ホワイト「君達は 今! イッシュ地方への 第一歩を 踏み出した
!」

チェレン「どこぞのおっさんみたいな台詞だな」

ベル「とにかく早く行こうよー!」

ホワイト「うん」

ベル「きゃあっ」ドテッ

チェレン「大丈夫か!?!結局、靴ズレ直してもこけるんじゃないか」

ベル「えへへ…ごめんごめん」

ホワイト「見えた…」

チェレン「?とりあえず早く行こう!」

アララギ「遅いわよー。何やってたのよ」

ホワイト「いやー、ちよっくらレポートを…」

ベル「あたしはクツズレを…」

アララギ「???」

チエレン「分からないでしょうね」

アララギ「とにかく、今からポケモンの捕まえ方を教えるわよ！」

ベル「はい！」

アララギ「こういう草むらに入ると…」

ナレーション『あ！やせいの ミネズミが とびだしてきた！』

ホワイト「あ！なんかネズミが出た」

チエレン「ミネズミ…だな」

ベル「どうやって捕まえるのかなあ〜」

ホワイト「チラチラ」

ベル「…なんか、視線が」

ホワイト「ん？ベルさんをチラ見してただけ」

ベル「何それ…」

アララギ「ゆけ！チラーミィ！」

チエレン「チラーミィか。まるでホワイトみたいな名前だな」

ホワイト「どういう意味だよ」

アララギ「チャーミーのはたくで、相手のHPを削るのね」

ベル「うんうん！」

チェレン「ベルは本当に初めてみたいだな」

アララギ「そこで、モンスターボール！…あら？」

ホワイト「どつたの？」

ナレ『ボックスにいているポケモンがいつぱいなのでつかえませ
ん！』

ホワイト「どこのGB版だよ」

アララギ「冗談よ。それではモンスターボールを投げて！」

ナレ『やったーミネズミをつかまえたぞ』

ホワイト「ナレーションやる気出せよ」

アララギ「…と、いう感じね」

ベル「へー！そうなんだ！」

アララギ「それじゃ、皆、

私はこの先のカラクサタウンで待つてまーす！」

ベル「はい…そうだ！せっかくだから、勝負しようよ！」

ホワイト「ま…また？」

ベル「ポケモンを捕まえた数で勝負するんだよ！」

ホワイト「なるほどね」

チエレン「そうだな。その方が楽しそうだ。

それじゃ、カラクサに着くまで、ポケモンの回復は自宅という事で」

ベル「私とポカブのコンビが一番に決まってるもん！」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652o/>

イッシュ地方ぶらり珍道中

2010年10月17日20時43分発行